基礎断熱の線熱貫流率について、デュポン・スタイロが任意評定を解説

北海道SHS会・大会を開催


挨拶する
首藤会長


線熱貫流率の計算について説明する杉浦氏（デュポン・スタイロ）


北海道大会の様子

スタイロフォームを使った外張り断熱をベースに省エネで快適な家づくりを推進する北海道SHS会（首藤一弘会長、㈱丸三ホクシン建設社長）は、9月11日に札幌市内のホテルで第33回全道大会を開催した。今回は、11月から変わる計算方法によってUA値が悪化する問題に対応する任意評定の説明もあった。

冒頭の挨拶で首藤会長は、「法改正や資材高騰によって建築業は厳しい状況が続いているが、地震や豪雨からの復興のタイミングでは、われわれの仕事が社会貢献というかたちでお役に立つ場面が増える。また、ある経済評論家によればインフレはこの先40年ほど続き、仕事も拡大する」と語り、会員を鼓舞した。

続いて挨拶に立ったデュポン・スタイロ㈱副社長で営業本部長の椙田知宏氏は、厳しい経済環境のピンチをチャンスと捉え、エンドユーザーに選ばれる高性能な家づくりを後押しする取組みを考えていると語った。

このあと事務局から今年度の棟数推移や支部活動報告、宣伝活動報告が行われた。

続く研修の部では、温水パネルヒーターメーカーのピーエス㈱が夏の快適提案について、デュポン・スタイロが基礎の線熱貫流率の評価方法について、最後に北海学園大学経営学部教授の近藤弘毅氏が「地域企業の革新と生き残りについて―地場家具産地の経験をもとに―」と題して講演した。

今回は11月から計算方法が変わる線熱貫流率の評価方法についてまとめる。説明したのは、デュポン・スタイロ技術開発本部製品技術部の杉浦希氏。

任意評定と早見表を使い分ける

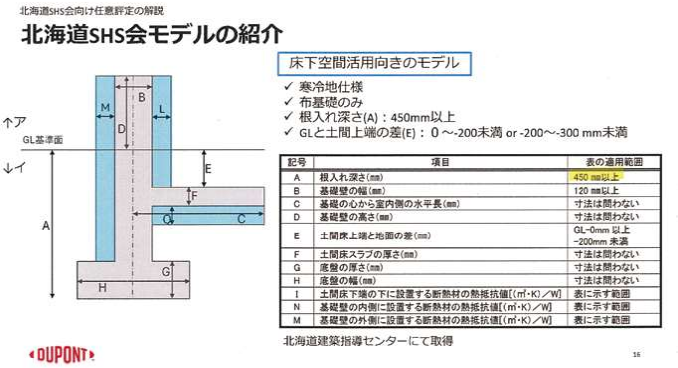
基礎断熱の評価方法が11月から変わる。旧計算法と呼ばれる現在の計算法は、性能評価などの申請受付が10月31日までとなる。新計算法では計算結果が悪化する（UA値が悪くなる）場合があるので、現在の標準仕様を確認してほしい。これが一番伝えたい点だ。

新計算は、大きく3つの方法がある。1つ目が、基礎形状を問わない代表値、2つ目が、基礎形状や断熱仕様を考慮した早見表、3つ目が任意評定だ。任意評定は、1や2で正しく評価できない基礎形状・仕様について個別に第三者機関が評価する仕様となる。

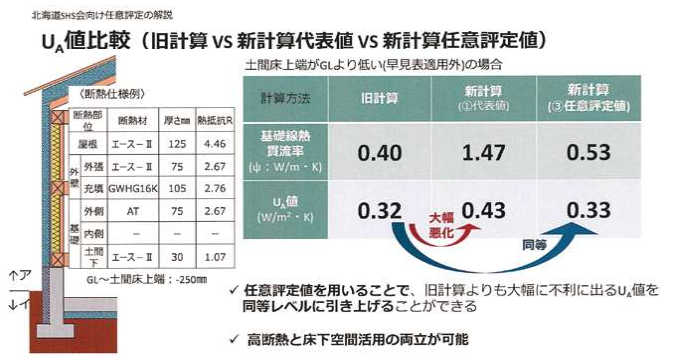
デュポン・スタイロでは、スタイロフォーム等の自社製品ユーザーを対象に、寒冷地で採用されている基礎形状の任意評定を取得した。それが、根入れ深さ450㎜以上、土間上端がGLより低い床下空間活用を前提とした基礎形状だ。

GLより土間が低い形状は任意評定で

この基礎形状で同じ断熱仕様の基礎断熱について線熱貫流率とUA値を計算したところ、別表のように旧計算でUA値0.32、代表値で計算すると0.43、任意評定では0.33となり、新計算移行により大幅に不利に出るUA値を、任意評定値の活用により、旧計算同等レベルに引き上げることが可能になる。







任意評定では、早見表と同様に表から線熱貫流率を読み取る形となる。

なお、布基礎において土間床がGLより高く、根入れが500㎜より深い場合は早見表でおおむね対応できる。

自社の基礎形状等をまず確認

確認してほしいことは、現在の標準仕様が早見表のモデルに適合しているかどうか。適合していなかった場合は、適したモデルの任意評定があるかどうか。

どちらかに適合すれば、仕様変更は必要ないか軽微で済むはずだ。

北海道SHS会および任意評定についての問い合わせは、事務局の富士化学工業へ㈱へ（℡011-842-3771）。